

## 最 終 試 験 の 結 果 の 要 旨

神奈川歯科大学大学院歯学研究科 歯科矯正 学講座 加藤桃子 に対する最終試験は、主査 不島健持 教授、副査 伊藤寿樹 教授、副査 玉置勝司 教授 により、論文内容ならび専攻内容について口頭試問等、矯正臨床に関し臨床能力試験をもって行われた。

その結果、合格と認めた。

主 査 不島 健持

副 査 伊藤 寿樹

副 査 玉置 勝司

# 論文審査要旨

片頭痛と睡眠時ブラキシズムの関連性：  
ブラックスチェッカー<sup>®</sup>を用いた咬合接触様式のパターン解析

神奈川歯科大学大学院歯学研究科

歯科矯正学講座 加藤 桃子

(指導：河田 俊嗣 教授)

主査 不島 健持 教授

副査 伊藤 寿樹 教授

副査 玉置 勝司 教授

## 論文審査要旨

学位申請論文である「片頭痛と睡眠時ブラキシズムの関連性：ブラックスチェッカーを用いた咬合接触様式のパターン解析」は、片頭痛と睡眠時ブラキシズムの関わりを知る目的で、片頭痛患者を対象に睡眠中の咬合接触状態を検討したもので、片頭痛患者において特に大白歯部での咬合接触が大きかったことより、片頭痛と睡眠時ブラキシズムの関与を示した論文である。

睡眠時ブラキシズムは睡眠中の歯のグラインディングまたはクレンチングを特徴とする口腔異常機能異常であり、情動ストレス等に誘発され中枢性に発現することが報告されている。一方、片頭痛はストレスやホルモンバランスが誘因となり発現するとされているが、明確な原因は示されていない。以前より睡眠時ブラキシズムと一次性頭痛との関わりが指摘されているが、報告の多くは一次性頭痛の一つである緊張型頭痛との関連性を示唆するものであり、片頭痛との関わりについての報告はわずかである。このような背景を踏まえ、本論文では睡眠時ブラキシズムが片頭痛の誘発因子になりうるとの仮説を立てた。そして、まず片頭痛患者における睡眠時ブラキシズムの発現状況の知ることを目的とし、睡眠中の咬合接触様式の評価を試みた。睡眠時ブラキシズムと片頭痛の関わりを知るといふ、高い目的を設定しこれまで関心の少ないテーマに取り組んでいることは、高く評価されると思われる。今後、歯科のみならず医科との連携により調査・検討すべき重要テーマである可能性があり、そこに踏み込んだ研究として意義があると考えられる。

研究方法の概略は以下のとおりである。前兆のない片頭痛と診断された女性 80 人（平均年齢  $42.98 \pm 9.6$  歳）を片頭痛群、風邪や二日酔いなどを含め頭痛の無い健康な女性 52 人（平均年齢  $39.25 \pm 9.2$  歳）をコントロール群とした。ブラックスチェッカー®を用いて、両群の睡眠時ブラキシズムの咬合接触状態を記録し、ブラックスチェッカー®の印記を解析することにより咬合接触様式と咬合接触面積を調査した。片頭痛の診断は、国際頭痛分類第 2 版に基づき、一般社団法人日本頭痛学会認定の頭痛専門医 1 名が行っており、研究対象の選択は適切に行われたと判断した。また咬合接触を知るため使用したブラックスチェッカーは、睡眠時ブラキシズムの咬合接触を評価する方法として、先行研究でその妥当性が報告されており、本研論文においても、研究目的に適した手法と考えられる。

結果として、年齢、BMI、および体温については、二群間に統計的な有意差を認めなかった。睡眠時ブラキシズムの咬合接触様式は、片頭痛群がコントロール群と比べ作業側における大白歯の咬合接触が有意に多くなり、接触面積も有意に大きかった。片頭痛群では睡眠時ブラキシズムが全ての歯を接触させ行われており咬合接触面積の割合も大きいことより、睡眠時にグラインディングを行っていることが示唆された。片頭痛患者における睡眠時ブラキシズムの実態を明らかにしたことは、本論文が初めてであり、今後の研究の展開が期待される。

本審査委員会は申請者が博士（臨床歯学）の学位に十分値するものと認めた。